学校現場における相談活動のイメージに関する検討

— スクールカウンセラーを主軸として —

修士課程 1 年	高	木	郁	彦
修士課程 1 年	樋	口	紫	音
修士課程 1 年	遠	藤	麻	美
修士課程 2 年	河	合	輝	久
修士課程 2 年	大	上	真	礼
教授	下	山	晴	彦

1. 問題と目的

思春期は、身体的にも心理的にも大きな変化が生じる時期であり、それに伴い様々な困難に直面することとなる時期である。そのような困難を自力で解決することは、独力での問題解決能力を成長させる点で適応的であるといえる。しかし、自力では解決できない困難に直面する場合もあり、そのような困難を独りで抱え続けることは不適応につながる可能性がある(永井・新井, 2007)。岩瀧(2008)は、「中学生が悩みを抱えた場合、周囲の誰かに相談ができる、ということは適応に大きな影響を与えている」と述べているが、このように、自力では解決困難な問題を抱えた際に「他者に相談する」ということは、不適応に陥ることを防ぐ上でも重要な対処行動の1つといえる。

思春期の相談相手として代表的な人物には、保護者、友人、教師、そしてスクールカウンセラー(以下、SC)などが挙げられるが、学校現場における心の問題の多様化などから親や教師のみのサポートでは十分でないことも多いと考えられ、SCの役割はますます重要になっていると推測される。実際に、平成7年4月に始まったSC活用事業は、平成22年度には公立中学校に限っても全国で8515校に配置されるまでに至っている(大塚, 2012)。

このようにSCの必要性が増し、配置校の拡大が進む一方で、SCに悩みを相談した中学生が調査対象者2075名のうちわずか2%であったという報告(永井・新井, 2005)があるなど、現実として悩みを抱えた中学生の多くはSCへの相談を行っていないことが示唆されている。さらに同報告では、SCに相談したいと思ったがしなかった中学生の割合が4.9%であったと述べている。さらに、小針(2008)は、SCが自身や相談室について「生

徒が気軽に相談できる敷居の低い場所」と認識していることを踏まえ、この認識と実際の利用との間に齟齬があることを示唆している。中学生の悩みの経験やSCへのニーズは存在すること(例えば、横島ら, 1996)から、何らかの要因によって中学生のSCへの相談行動が妨げられていると考えられる。水野(2007)は、中学生のSCへの相談行動について、援助ニーズの高い生徒ほどSCへの相談に対して否定的であると指摘していること、また学生の来談行動に関する研究においても、学生相談機関への否定的なイメージと来談意思は負の関係にあることが示されている(例えば、伊藤, 2006)ことから、SCへの相談行動に対して否定的なイメージがはたらいっている可能性が考えられる。また、中学生のカウンセリングに対するイメージは家族や友人のカウンセリングに対する態度の影響を受けるという報告(渡邊・飯田, 2008)もあり、実際に相談をする者が抱く相談活動に対するイメージだけでなく、相談者に近い周囲の者が抱く相談活動に対するイメージもまた相談行動に重要な影響を及ぼしていると考えられる。

そこで本論考では、「学校現場における相談活動のイメージ」について、SC導入側の意図、教師のSCに対するニーズ、中学生のSCに対するニーズとも関連させながら、複数の立場からみたSCに対するイメージに注目して先行研究の概観を行うこととした。またその上で、そうしたイメージと実際の相談行動の関係に関する研究を概観し、今後の展望についての考察を行う。学校現場に密接に関係する複数の立場から学校現場における相談活動に対するイメージを包括的に論じることにより、SCの在り方の見直しとさらなる発展につながる事が期待される。

2. SC 導入側が SC に期待する役割

SC のイメージや適切な利用について考える上で、SC の役割について理解しておくことは重要であろう。SC が導入された意図としては、「スクールカウンセラーの果たす役割は極めて重要であり、子どもたちの心の問題の多様化・複雑化という状況を踏まえると、すべての子どもがスクールカウンセラーに相談できる機会を設けていくことが望ましい」（中央教育審議会、1998）と提言されているように、生徒の持つ幅広い問題を解決し、生徒が容易に相談できる存在を作り出すことがあると考えられる。文部科学省（2007）は、SC の担う役割として、①児童生徒に対する相談・助言、②保護者や教職員に対する相談（カウンセリング、コンサルテーション）、③校内会議等への参加、④教職員や児童生徒への研修や講話、⑤相談者への心理的な見立てや対応、⑥ストレスチェックやストレスマネジメント等の予防的対応、⑦事件・事故等の緊急対応における被害児童生徒の心のケア、を挙げている。ただし、①～⑦を機械的にこなしているだけでは SC として効果的な役割を果たしているとはいえない（松岡、2011）。

学校臨床心理学の見地からは、問題解決的支援・予防的支援・開発的支援の3つが学校教育と心理臨床のコラボレーションが活かされる支援活動とされている（伊藤、2010）。SC が担う役割としては、大きく直接的援助と間接的援助に分けられ（石隈、1999）、前者には児童生徒に対する心理教育的アセスメントやカウンセリング（個人・集団）が含まれ、後者には教師や保護者にコンサルテーションを行うことで児童生徒を援助する方法があるが、コーディネーションのように両者を共に利用することもある（今田ら、2001）。その他、伊藤（2009）は米国 SC 協会の求める SC の役割として、教職員と共に学校改善を推進する協働的なリーダーや、子どもの成長に必要な環境を提唱するアドボケートとしての活動を挙げている。学校というコミュニティに SC が参入し、機能するためには、近年コラボレーション（協働）という観点も重要になっている。ただし、SC の役割は SC 活用のシステムによるため、自治体の教育委員会が SC をどのように活用しようと考えているかという方針にも影響を受ける（松岡、2011）ことには注意をしなければならない。

また、SC のもつ特徴として外部性が挙げられているが（文部科学省、2007）、これは生徒や保護者、教職員と利害関係が発生しにくいという利点をもたらす一方で、彼らにとって得体の知れない存在ともなり得るため、相談及び協働の促進と抑制の両方に関わっていると考えら

れる。したがって、これは生徒や教師が外部性を持つ SC をどう捉えているか、という問題にも関わってくるだろう。いずれにせよ、外部性の担保と協働は両立を求められるものである（松岡、2011）。

SC のスタンスとしては、コンサルテーションなどの教師支援を活動の中心とすべきという考えがある一方で、開かれた相談室運営を行うことで生徒の日常生活の中で心理的な援助を行おうとする方向性もある（半田、2003）。瀬戸・下山（2003）は、学校全体への援助を基盤とした上で、個人を捉えていく方向性を持つと同時に、カウンセリングルーム等の「場」が存在するという点から、心理教育的授業実践や自由来室活動の有効性を指摘している。ただし、SC 側からは自由来室活動が援助的な機能を持っていると考えられている一方、教職員側からはその機能に疑問ももたれている（半田、2005）。

3. 教師からみた SC に対するイメージ

教師からみた SC に対するイメージは主に質問紙を用いた調査研究から検討されている。Best et al. (1981) は、多くの教師が SC に対してポジティブなイメージを抱いており、学校に SC が必要な存在であるとみなしている、という結果を報告している。しかしながら、ごく少数の教師は SC を脅威に感じ、「自分の権威や規則が侵されてしまうのではないか」といった懸念や「SC は教師のもっている問題を理解していないのではないか」といった不安を抱いていることが示唆された。同様の方法により、Cooper et al. (2005) も中学校教師の SC に対するイメージや態度を検討している。ここでも、教師の多くが SC に対してポジティブなイメージを抱いていることが明らかにされており、特に、SC が外部性をもっている点や、専門的な職である点に価値をおいていたと報告している。一方で、SC に対して非常にネガティブなイメージを抱いている教師もいることが明らかにされている。具体的には、生徒が SC 制度を悪用してしまうのではないか、生徒指導との協働がうまくいかないのではないかといった懸念の存在が示されており、Best et al. (1981) で見出された、SC は教師の存在を脅かすというネガティブなイメージとは質の異なるイメージが抽出されているといえる。また、SC そのものに対するイメージを直接検討してはいないが、安藤・岡田（1995）は小中学校教諭の教育相談室に対するイメージを検討し、専門性を持った受容的な雰囲気機関である一方、閉鎖的で近寄り難く、任せられるかどうか決めかねるというようなイメージを抱いていることを示している。専門性も

たらず肯定的側面と否定的側面が見出されている点は SC に対するイメージに焦点を当てた Cooper et al. (2005) や Best et al. (1981) の結果と一致しており、教師の SC に対するイメージにおいては、SC の専門性が念頭におかれていることが示唆される。一方、金丸ら (2004) は、いずれの研究とも異なる結果を見出している。金丸ら (2004) によれば、教師は SC に対して「母性的なイメージを抱いている」とし、教師は生徒に指導的に関わるので SC には優しく接してほしいという期待があるのではないかと考察している。この考察は、教師は自らの役割とは異なる役割を SC に求めていることを示唆しているといえる。

以上より、教師からみた SC に対するイメージは一概にポジティブなものであるとはいえないことが示された。多くの教師が SC に対して良いイメージを抱き、その存在価値や意義を認めている一方で、少数ながら SC へネガティブなイメージや懸念を示している教師もいることが示唆されている。彼らがネガティブなイメージを抱く理由は、①教師の立場が侵されるのではないかと懸念、②生徒が SC 制度を適切に利用できないのではないかと懸念、の二点に大別されると考えられる。これらの SC に対するネガティブなイメージは、学校現場における生徒および教師の心理的問題を SC に相談する際の妨害要因になると考えられる。従って、SC はこれらのネガティブイメージを念頭に置きつつ、それらを解消するような関わりを推進していく必要があると考えられる。

4. 中学生からみた SC に対するイメージ

以下では、中学生の SC や相談室自体に対するイメージ全般についての基礎研究を概観する。

4-1. 中学生の SC に対するイメージ

中学生の SC に対するイメージは、調査研究やインタビュー調査によって検討されている。Murgatroyd (1977) は、当時初めて SC を取り入れた学校の中高生を対象に、SC のイメージについて質問紙調査を行い、生徒達が SC を個人的な悩みではなく学校や進路に関する悩みを相談する相手としてみなしていたことを明らかにしている。ただし、調査対象となった学校では SC 制度の充実を目標として特化したプログラムが組まれていたため、生徒は SC を主幹教諭のような存在と捉えていた。一方、Siann et al. (1982) によるインタビュー調査からは、個人的な悩みや家族に関する相談事については、教師に

対してよりも SC に対して相談したいとの回答が上回ったことが報告されている。また、Fox & Butler (2007) も、多くの中学生にとって SC は「役立つ」ものであり、「教師や家族以外の頼れる存在」であると報告している。

半田・有賀 (2002) は、中学生を対象に SC に対するイメージや関わりに関する形容詞対を作成し、より直接的な SC に対するイメージを検討することで、中学生が SC を「家庭的イメージ」「社会的イメージ」「静的イメージ」という3つの視点から捉えていることを明らかにした。同様の結果は、本邦における中学生の SC に対するイメージに関する調査の多くで得られている (例えば、半田, 2003; 金丸ら, 2004; 大西ら, 2005; 佐光ら, 2007)。一方で、橋本ら (2009) は、「特別な対象に限定した相談をする人」という中学生における SC に対する偏った見方に関するカテゴリーも抽出している。

このように、中学生の SC に対するイメージは概ね肯定的である。しかし、多くの先行研究は SC に相談したことのある者とそうでない者を明確に区別して検討しているわけではない。そのため対象者の中には、SC に対し漠然としたイメージしか持っていない、SC と関わりがあまり十分ではない生徒が多く含まれていると考えられ、それ故にポジティブであると同時にネガティブなイメージも含まれていると考えられる。また、SC に対するイメージの差異や不確かさは、SC の学校内での活動形態によっても変化を受ける可能性がある。

4-2. 中学生の相談室に対するイメージ

中学生の相談室に対するイメージについては、自由記述を用いた調査が行われており、刀祢 (2000) が「依存・信頼」「親近感」「受容への期待」「肯定的評価」「両価的感情」「違和感」「非関与の態度」「不信・疑問」「イメージ無し」といったカテゴリーを抽出しているほか、谷中ら (2009) は「サポート」「居場所」「遊び」「学習」「その他」の5つのカテゴリーを抽出している。谷中ら (2009) は、「サポート」カテゴリーについて、相談員による専門的支援に言及した「専門家」下位カテゴリーに加え、相談できることは知っているが気が進まないなど、両価的な気持ちに言及した「Ambivalent」下位カテゴリーから構成している。また、「居場所」カテゴリーについて、相談室の雰囲気や肯定的に評価した「Positive」下位カテゴリーや相談室の雰囲気を否定的に評価した「Negative」下位カテゴリーに加え、「いいところだと思いが入りづらい」など、相談室の雰囲気を両価的に評価した「Ambivalent」下位カテゴリーや保健室、別空間など、日常的な空間とは違うことに言及した「非日常」下位カテゴリーか

ら構成している。いずれの研究においても、相談室という場やその機能に対する肯定的イメージおよび否定的イメージが詳細に抽出されている一方で、相談室に対する両価的なイメージは具体性に欠ける点で共通している。このことから、中学生が抱く相談室に対して抱く両価的なイメージの構造とその形成過程については、今後詳細に検討を行う必要があるといえる。

4-3. 中学生の SC に対するイメージと相談行動の関連

森田 (1997) は、学生相談室を対象とした研究の中で、来談準備因子としての相談室イメージに焦点を当てているが、SC に対するイメージも「SC に相談をしたい」というニーズ及び相談行動が発生する前段階として影響していると考えられる。半田・有賀 (2002) は、SC に対して「社会的イメージ」を強く感じる中学生は SC と話したいというニーズを強く持つこと、さらに「社会的イメージ」と「SC との相談へのニーズ」が関連していることが認められ、「社会的イメージ」は中学生が楽しいおしゃべりの延長としての相談を求めることにつながることを報告している。大西ら (2005) も「SC と話をする」と「SC との相談」へのニーズをもつ中学生に「親和的イメージ」があることを示している。また、イメージと実際の SC への相談行動との関係については、半田 (2003) が「おしゃべり」「息抜き」「相談」という心の健康維持にかかわる主体的な理由による来室と SC に対する肯定的イメージの高さに関連を見出している。

以上から、SC に対して親和的なイメージなどの肯定的イメージを抱えていることが、SC へ相談したいというニーズにつながると考えられる。しかし、先行研究の多くにおいて、SC に相談経験のある生徒のみが対象となっているわけではない。SC へ相談経験のあるほとんどの生徒が SC に対して良い印象を抱いており、特に SC に相談することで学校内外の生活における「対人」、「感情」、「行動」といった側面において良い影響がもたらされたという報告 (Lynass et al., 2012) を踏まえると、実際の SC との関わりを通じて SC に対するイメージがどのように変容し、その後の SC への相談率は高まるか、さらに SC への相談前後で SC に対するイメージがどのように変容するかなどの検討を行うことで、より詳細に SC に対するイメージと実際の SC への相談との関連性を明らかにする必要があるといえよう。

ただし、これらの結果は、「相談」「カウンセラー」という概念へのイメージが先行したことによってもたらされた可能性も示されている。例えば、半田 (2003) は肯定的イメージが先入観による可能性があることを指摘し

ており、大西ら (2005) も「親和的イメージ」とニーズの関連から「優しい SC に相談したい」という素朴な期待が生徒にあるのではないかと述べている。また、静的イメージについても、おとなしい・静かといった固定観念に関連する可能性が示されている (半田・有賀, 2002) ことや、カウンセラー＝“心の専門家”という認識は広まっているものの、具体的なイメージを持つには至らない状況、「治療的かわりをする人」等の偏った見方が存在することも指摘されている (橋本ら, 2009)。

4-4. 中学生の SC 及び相談室に対するイメージへの影響

中学生を対象として、SC に対するイメージに影響を与える要因を検討している研究は少ないが、その中では学年や学校段階の他、生徒を取り巻く周囲の SC に対する認知といった変数が検討されている。

まず、学年については、中学 1 年、2 年は校内相談室に対してより「肯定的イメージ」を持っており、中学 3 年はカウンセラーに対してより「親近感」というイメージを持っている (刀祢, 2000)。次に学校段階については、カウンセラーや校内相談室に対して「否定的イメージ」を持つのは高校生に多いという報告 (刀祢, 2000) がある一方、「専門的なサポート」のイメージは中学生よりも高校生で強く、「遊びのイメージ」は高校生よりも中学生の方が割合としては高いと報告 (谷中ら, 2009) されている。以上より、中学生は SC、相談室に対してその親しみやすさの観点から肯定的なイメージを抱いていると考えられるが、高校生における SC、相談室に対するイメージに関する見解は一致していない。

学年や学校段階といった変数とは異なり、渡邊・飯田 (2008) は、中学生のカウンセリングに対するイメージに影響を与える要因として家族と友人のカウンセリングに対する態度を検討している。そこでは、「家族の汚名の心配」がカウンセリングに対するイメージを低下させる一方で、「友人の援助への欲求と態度」および「友人のカウンセリングへの信頼」がカウンセリングに対するイメージを肯定的に捉えることへ影響を与えることが明らかにされている。さらに、肯定的イメージが高まると「汚名への心配」が低下し、「援助への欲求と態度」および「カウンセリングへの信頼」が高まることが示されている。この知見は、個々の生徒が抱く SC や相談室に対するイメージが、個々の生徒を取り巻く周囲の持つ SC や相談室に対するイメージからも影響を受けることを示唆している。よって、SC や相談室に対するイメージを考える際、個々の生徒が抱く SC や相談室に対するイメージの

みならず、教師、友人、家族など彼らを取り巻く身近な周囲が抱く SC や相談室に対するイメージについても検討する必要がある点で特筆すべき知見であるといえる。このように SC や相談室に対するイメージを包括的に検討することが今後は必要であるといえよう。

5. 総合考察

本稿では中学校における SC の適切な在り方についてイメージを中心に探ることを目的として、SC 導入側が意図する SC の役割、教師及び中学生の SC に対するイメージと、ニーズや相談行動との関連について先行研究の概観を行った。以下では、その結果を踏まえ、学校現場における相談活動に対するイメージについて考察する。

SC のイメージに関しては、肯定的なものが見られる一方で、実際の相談行動につながるかという点では疑問もあり、SC の設置形態や活動の仕方によって左右されるようであった。SC は実情や持ち味に合わせて活動することが重要である（半田，2005）ため、活動自体に多様性はある。だが、一方で曖昧な役割を持つ存在となってしまう可能性や、その結果として SC に対するイメージ自体が漠然としている可能性もある。全生徒が SC に相談する機会を持つことが望まれている以上、生徒からのイメージがより明確に形成されるような働きかけが必要だろう。そのため、利用者である中学生から捉えた SC 像を検討することが重要である。それによって各学校の「SC を導入する目的」と、「利用者である中学生の認識」の間のギャップを見出すことが可能となり、SC の適切な活用につながる考えられる。

多様化・複雑化する中学生の悩みに対する援助資源としての SC ではあるが、特に「開かれた SC 活動」が行われていない中学校では、「友人や家族、教師等に話づらい深刻な悩みを相談する相手」であると生徒から捉えられている傾向があり、SC に相談することができない生徒も存在する。SC に抱くイメージは肯定的に見えても、あくまで理想像であって、現実的には生徒との接点がなく、イメージと行動が結びついていない可能性もある。したがって、来談準備因子であるイメージをどう改善していくかは今後の課題となるだろう。ここでは半田・有賀（2002）を踏まえ、「SC の認知→SC へのイメージ→SC へのニーズ→SC への相談行動（→SC に対するイメージの修正）」という関係を提案したい。つまり、SC の存在を認知することでイメージが形成され、ニーズ及び相談行動につながるのではないだろうか。この関係におい

ては SC に対する認知度が低ければイメージ自体も構築または明確化されないといえる。「生徒が SC にどのようなイメージを抱いているか」ということは「生徒がどの悩みを SC に相談するか」あるいは「どういう関わりをしたいか」というニーズに関連する。よって、SC の活動について広報する機会を設け、どのような存在であるかを周知していくことが、学校現場における SC 活用の促進につながる考えられる。ときには全生徒が SC に関わる機会を設けることも重要だろう。ただし、SC は相談業務を実施する時間が限られているのが現状である（佐光ら，2007）ため、Fox & Butler（2007）が指摘しているように、SC の在籍時間を増やす、SC の人数を増やす等の対応も検討する必要がある。

また、水野ら（2006）は、中学生の被援助志向性を高めるアプローチと被援助志向性の低い生徒でも利用できるシステムを作るというアプローチの 2 つを指摘しており、本検討は主に前者に関連している。しかし 2 つのアプローチは相互に関連しているとも考えられるため、利用しやすいシステムを作ることで SC の認知度やイメージの明確化・改善にもつながるのではないだろうか。

これまでの日本における SC へのイメージに関する研究を概観すると、その数が少ないだけでなく、イメージに対する研究者の捉え方も一貫しておらず、「イメージ」の指す対象を明らかにした体系的な検討が必要といえよう。また、中学生からみた SC に対するイメージに関しては、中学生の SC への相談経験の有無を考慮して検討した研究が少ない。生徒は SC との関わりを通して SC に対するイメージを形成する（半田・有賀，2002）ことを踏まえれば、SC への相談経験の有無により生徒の SC に対するイメージも異なる可能性が高いと考えられる。SC への相談経験の有無で SC に対するイメージを比較検討し把握することは、SC の適切な活用につながるためにも重要であると考えられる。よって、SC への相談経験の有無を明確にした上で SC に対するイメージを詳細に検討し理解する必要がある。また、先行研究の多くが生徒の SC に対するイメージについて、質問紙を用いて自由記述データを収集し、意味内容の観点から分類し探索的に検討を行っている。しかし、このアプローチでは、生徒の SC に対するイメージがどのような形成過程を辿るかについては明らかにできない。また、個々の生徒のカウンセリングに対するイメージは生徒の身近な周囲のカウンセリングに対する態度が影響している（渡邊・飯田，2008）とされているが、SC に対するイメージの影響要因がどのような状況や場面で作用するかについてもこれまでのアプローチでは明らかにすることは困難であ

る。したがって、今後は質的研究法を採用することによって、生徒のSCに対するイメージの形成過程を検討することが求められる。

加えて、SCに抱くイメージの性差や、SC自体の性差の影響について検討しているものは少ない。刀祢(2000)は生徒の性別によりSCに対するイメージに差が存在することを示唆しているが、今後結果を精緻化することが望まれる。加えて、Fox & Butler (2007) が示唆するようにSCの性別によって生徒が抱くイメージが変わる可能性もある。対人関係に悩みを持ちやすく、自立への試みの時期にあたる中学生(例えば、岩瀧・山崎, 2008)にとって、相談するSCがどのような属性を持つかという点は重要になるといえるだろう。

また、本研究では中学生を中心に概観したが、中学生を取り巻く大人という点で、教師や保護者のSC及び相談室に対するイメージについてもさらに焦点を当てていく必要がある。しかし現状では、保護者を対象にした研究は特に寡少である。家族の汚名の心配が生徒のカウンセリングに対するイメージを低下させること(渡邊・飯田, 2008)や否定的なイメージが来談を抑制する可能性があることを踏まえると、保護者が抱くSCに対する否定的なイメージを生徒が取り込み、生徒は保護者から取り込んだSCに対する否定的なイメージによってSCに相談しないという過程も考えられる。この過程を実証的に検討するためにも今後は保護者のSCに対するイメージが生徒にどう影響を与えるかに焦点を当て、質的研究法を用いた詳細な検討が重要となる。また、多くの教師がSC制度の拡充を必要とし、SCとの連携を強く望んでいる(吉澤・古橋, 2009)ことやSCに心理援助の専門職としての役割を期待している(草野ら, 1996; 横島ら, 1998)ことから、教師からのニーズも大きくなっていると考えられる。したがって、教師のSCに対するイメージとニーズ等の関連要因についても今後詳細に検討し、円滑な連携や協働のための方法を考えていく必要があるだろう。

引用文献

安藤智子・岡田珠江(1995). 教師の教育相談室に対するイメージと利用の実際 日本教育心理学会総会発表論文集, (37), 287.

Best, R. E., Javis, C. B., Oddy, D. M., & Ribbins, P. M. (1981). Teacher attitudes to the school counsellor: A reappraisal. *British Journal of Guidance and Counselling*, **9**, 159-172.

Cooper, M., Hough, M., & Loynd, C. (2005). Scottish secondary teachers' attitudes towards, and conceptualisations of, counselling. *British Journal of Guidance and Counselling*, **33**, 199-211.

Fox, C., & Butler, I. (2007). 'If you don't want to tell anyone else you can tell her': young people's views on school counseling. *British Journal of Guidance and Counselling*, **35**, 97-114.

半田一郎(2003). 中学生がもつスクールカウンセラーへのイメージ—学校の日常生活での活動を重視するスクールカウンセラーに関連して— *カウンセリング研究*, **36**, 140-148.

半田一郎(2005). ある公立中学校の2年生が持つスクールカウンセラーへのニーズ—開かれた相談室運営である「自由来室活動」と関連して— *学校心理学研究*, **5**, 3-13.

半田一郎・有賀直美(2002). 自由来室活動を行うあるスクールカウンセラーに対する中学生の捉え方 *学校心理学研究*, **2**, 61-69.

橋本和幸・田中理恵・上野道子・倉橋朋子(2009). 中学生から見たスクールカウンセラー像とその有効な関わり *日本青年心理学会大会発表論文集*, (17), 42-45.

今田里佳・後藤正幸・吉川領一・石隈利紀(2001). 生徒支援における専門性を活かした役割分担と連携: 学校心理学に基づくスクールカウンセラーの実践 *教育実践研究: 信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要*, **2**, 1-12.

伊藤亜矢子(2009). 学校でのコミュニティ・アプローチ 伊藤亜矢子(編) [改訂版] *学校臨床心理学—学校という場を生かした支援—* 北樹出版 pp.12-28.

伊藤美奈子(2010). 1.4 学校臨床心理学 1章 学校臨床心理学の理論 伊藤美奈子・相馬誠一(編) *グラフィック学校臨床心理学* サイエンス社 pp.2-18.

伊藤直樹(2006). 学生相談機関のイメージ及び周知度と来談意思の関係 *心理学研究*, **76**, 540-546.

石隈利紀(1999). 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・チームによる心理教育的援助サービス— *誠信書房*

岩瀧大樹(2008). 中学生が抱える悩みおよび悩みに対する相談相手・相談抑制理由に関する研究-1 昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要, **17**, 53-68.

岩瀧大樹・山崎洋史(2008). 中学生への教育相談的援助サービスに関する研究—教師への援助要請スキルとパーソナリティとの関連— *東京海洋大学研究報告*, (4), 27-35.

- 金丸隆太・小林正雄・佐藤隆之・青地邦宏・櫻井世里・前田隆浩 (2004). スクールカウンセラーに対するイメージおよびニーズと学校風土の関係 (1) 一生徒, 教員, 保護者それぞれが持つイメージの違い— 日本教育心理学会総会発表論文集, (46), 582.
- 小針誠 (2008). 中学生はスクールカウンセリングを利用しているのか?—心理主義化する現代日本社会における中学生の悩みとその相談先— 同志社女子大学総合文化研究所紀要, **25**, 26-40.
- 草野香苗・太田宣子・佐々木栄子・中島義実・原田克己・金井篤子・蔭山英順 (1996). スクールカウンセラーの役割に関する研究 日本教育心理学会総会発表論文集, (38), 509.
- Lynass, R., Pykhtina, O., & Cooper, M. (2012). A Thematic Analysis of Young People's Experience of Counselling in Five Secondary Schools in the UK. *Counselling and Psychotherapy Research*, **12**, 53-62.
- 松岡靖子 (2011). スクールカウンセラーが学校現場で機能するための活動と工夫について—教師との連携に焦点を当てて— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学, **58**, 35-45.
- 水野治久 (2007). 中学生が援助を求める時の意識・態度に応じた援助サービスシステムの開発 平成16年度～平成18年度科学研究費補助金 (基盤研究C (1)) 研究成果報告書 (課題番号 16530423)
- 水野治久・石隈利紀・田村修一 (2006). 中学生を取り巻くヘルパーに対する被援助志向性に関する研究—学校心理学の視点から— カウンセリング研究, **39**, 17-27.
- 文部科学省 (2007). 児童生徒の教育相談の充実について 一生き生きとした子どもを育てる相談体制づくり—(報告) 2 スクールカウンセラーについて <http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/kyouiku/houkoku/07082308/002.htm> (2013年3月9日)
- 森田美弥子 (1997). 学生相談室イメージと来談の関係—大学生を対象にして— 心理臨床学研究, **15**, 406-415.
- Murgatroyd, S. J. (1977). Pupil Perceptions of Counselling: a Case Study. *British Journal of Guidance and Counselling*, **5**, 73-78.
- 永井智・新井邦二郎 (2005). 中学生における悩みの相談に関する調査 筑波大学発達臨床心理学研究, **17**, 29-37.
- 永井智・新井邦二郎 (2007). 利益とコストの予想が中学生における友人への相談行動に与える影響の検討 教育心理学研究, **55**, 197-207.
- 大西良・辻丸秀策・鋤田みすず・大岡由佳・山口智也・岩永直美・福山裕夫 (2005). 中学生の相談ニーズとイメージとの関連性について—開かれた相談室活動を重視するスクールカウンセラーを通して— 久留米大学文学部紀要 社会福祉学科編5号, 27-35.
- 大塚義孝 (2012). わが国におけるスクールカウンセリング 村山正治・滝口俊子 (編) 現場で役立つスクールカウンセリングの実際 創元社 pp.35-46.
- 佐光恵子・時田詠子・千明美佳 (2007). スクールカウンセラーに対する中学生の意識～イメージと相談ニーズの観点から～ 上越教育大学研究紀要, **26**, 199-209.
- 瀬戸瑠夏・下山晴彦 (2003). 日本におけるスクールカウンセリングの現状分析—文献レビューによる活動モデル構築への展望— 東京大学大学院教育学研究科紀要, **43**, 133-145.
- Siann, G., Draper, J., & Cosford, B. (1982). Pupils as Consumers: Perceptions of Guidance and Counselling in a Scottish School. *British Journal of Guidance and Counselling*, **10**, 51-61.
- 刀祢真紀子 (2000). <彙報>校内相談室への来談に関する一考察—中高生の相談室イメージと依存性・精神的健康との関連について— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学, **47**, 457-459.
- 中央教育審議会 (1998). 答申「新しい時代を拓く心を育てるために一次世代を育てる心を失う危機」 <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/980601.htm> (2013年3月9日)
- 渡邊亮子・飯田順子 (2008). 中学生のカウンセリングに対するイメージに影響を与える要因 日本教育心理学会総会発表論文集, (50), 738.
- 谷中祐香・江口佳織・川島一晃・平石賢二・小倉正義・野田有美 (2009). 中学生・高校生の悩みと相談に対するニーズ (8)—相談室イメージと来室行動の関連に注目して— 日本教育心理学会総会発表論文集, (51), 396.
- 横島義昭・大野精一・三浦美智子・石隈利紀 (1998). スクールカウンセラーの役割に関する学校心理学的研究 (1) —高校生を対象としたニーズ調査の結果より— 日本教育心理学会総会発表論文集, (40), 362.
- 横島義昭・大関健道・難波博子・小野瀬雅人・大野精一・半田一郎・石隈利紀 (1996). 中学生・高校生がスクールカウンセラーに求める援助をめぐる—学校心理学に基づく調査結果と生徒自身による議論から— 日本

教育心理学会総会発表論文集, (38), S76-S77.

吉澤佳代子・古橋啓介 (2009). 中学校におけるスクール
カウンセラーの活動に対する教師の評価 福岡県立大
学人間社会学部紀要, 17(2), 47-65.

(指導教員 下山晴彦教授)